

特別活動部会

< 県研究主題 >

望ましい集団活動を通して、生徒一人ひとりの自主的、実践的な態度の育成と豊かな人間関係をはぐくむ指導の充実と、評価の工夫・改善

提案 1

提案者 飯島 和也（横須賀地区）

< 研究主題 >

「宿泊研修を通して、学級・学年・学校づくりの基礎を築く」

1 提案内容

横須賀市の指導の重点より

「認め合い高め合う関係を築く力を育てる」

- ・人と関わるよさや集団で活動する価値を、子どもに実感させる。
- ・集団や社会と関わることを通して、子どもに規範意識や社会性を付けさせる。
- ・一人ひとりが他者の考えや思いを理解し、集団の一員として自分の力を発揮することを通して、自主的・実践的な態度を育てる。

学校教育目標より

「幸せに生きる」

学級活動などを通して、「集団の中で個を活かす」ことを目指している。

(1) 実践報告

三浦ふれあいの村での1学年、5クラスによる宿泊研修

①目的

- ・一人ひとりが中学生としての自覚と責任をもった行動を身に付ける。
- ・健康で社会的な活動の仕方や、集団行動（班・学級・学年）の在り方を考え、それを身につける。
- ・宿泊研修での活動を通して、学級や学年の集団づくりを積極的に進め、仲間や先生方とのより良い関係をつくりあげる。

②当日の活動

- ・ウォークラリー、野外炊事
- ・挨拶と整列の練習
- ・学級活動（学級目標づくり）
- ・グループワーク

三浦ふれあいの村のプログラムの中から選択し、決定し、実施した。

(2) 成果と課題

①成果

- ・挨拶、声だし、規範意識の向上などに成果がみられた。
- ・班員を理解し、協力できるようになり、個々の役割についての責任感が育った。
- ・職員に褒められた経験が自己肯定感を持つことにつながった。

②課題

- ・外発的な理由で動くことが多いことから、内発的動機で行動できるように指導を継続したい。
- ・お互いのある程度理解するところにとどまらず、お互いを「認め合い・高め合う」ところまで持っていきたい。

2 協議内容

《質疑》

- ・Q:早い時期におこなう狙いは？

A:19の小学校から来ることもあり、お互いを知り、人間関係作りをするため。

- ・Q:早い時期に行うので先生の共通理解をどうしているか？

A:3月から事前に学年会を持ち、話し合っ準備をする。

- Q:学級内の組織づくりもやるのか？

A:宿泊研修後、学校にもどってから行う。

- Q:グループワークはどのような内容か？

A:三浦ふれあいの村で準備されているもので良いものを選んでいる。

- ・Q:班の作り方は？

A:教室の座席をもとに作ったものでおこなう。

《各校での取り組みの紹介》

- ・宿泊研修（キャンプ）でグループエンカウンター（仲間づくり）をやったことがある。早い時期にやることに意味があった。
- ・5月中旬、修学旅行にあわせ自然教室をやっている。
- ・体育祭の取り組みで人間関係づくりを取り入れている。
- ・宿泊をやっている。その中で仲間作り、人間関係作り（グループエンカウンター）を取り入れている。
- ・5月体育祭（クラスの中の人間関係が分かる）、6月校外学習バーベキュー（お互いをさらに知る）、2月に宿泊をやっている。

《4月当初の学級・学年作りの工夫などの実践例紹介》

- ・5月体育祭（仲間作り）：掲示物コンクール←学級対抗での取り組み

3 まとめ

(1)助言

宿泊研修は、人間関係作り、集団行動の大切さ（健康安全を含む）を学ぶ良さ、課題がある。学級目標を決め、それを発表する場を設けるなど、話し合いの内容を共有する場を設定することも良いのではないか。

集団の中で個を活かす、自覚を持たせたり、責任を持たせたりすることができており、リーダーの育成としても良いのではないか。

<研究主題>

生徒が主体的に活動できる体育祭作り
～ピアサポートの考え方を取り入れて～

1 提案内容

平成20年代はじめの学校の生徒の実態から、特別活動の充実および改善を図ることが必要となり、全職員で取り組み、積み重ねてきた実践を発表であった。

体育祭を生徒自ら作り上げていくことに重点が置かれた実践であり、これまでのクラス対抗の体育祭から縦割り異年齢交流のチーム（ブロック）対抗での体育祭へ変えていくものである。そのため、全教職員の共通理解を得ることからはじまり、教職員の組織の見直し、競技種目の精選、応援合戦の導入の検討、そして、生徒実行委員会の組織の構築等、多くの議論をへて新しい体育祭の形態を作り上げることができた。

また、体育祭終了直後の「学活」において、全校で体育祭のふりかえりのアンケートと作文、チーム（ブロック）メンバーへの「ありがとうカード」への記入を行った。ふりかえりのアンケートでは、体育祭の活動に対して自主的に取り組んでいるかを生徒自身に確認させる内容であり、「ありがとうカード」は、チーム内の先輩、後輩、同級生へのメッセージを記入することが傾向として多い。

このような活動を展開していくには、並行してリーダー養成を行っていく必要性があり、実際に市内の中学校で行っているピアサポート研修会の参加を通してリーダー育成を図っている実践も合わせて報告がなされた。

研修会の中で参加している生徒が、学校行事ごとに、活動中に予想されるトラブル事象を出し合い、その解決策を考えていく。ただし、その策を思案していく中で、ピアサポートの立場を採り入れたものを作り上げることで、「共に協力する」、「仲間を支える」、「学年や一人ひとりの違いがわかる」といった能力を持ったリーダーの育成を図っている。また、そこでの研修内容を、参加生徒が中学校区内の小学校へ赴き、小学生との交流を行うことで親密な関係を作り上げていることも紹介された。

2 協議内容

Q：体育祭の実施においての生徒の主体的な活動を詳細に教えてほしい。

A：応援合戦の内容の考案と検討では、応援リーダーが練習計画を含めた企画書の作成をしたり、応援旗を含めた応援関係グッズの作成に携わったりする活動がある。また、各種目のキャプテンは練習内容の立案や効率の良い練習内容の考案がある。

Q：体育祭以外での縦割りの交流はあるのか。

A：年度当初に対面式で縦割りの抽選会を行い、体育祭後の合唱祭での活動で交流合唱練習を行って、お互いにアドバイスをし、よりよい合唱となるように練習に励むようになった。

また、現在は実現していないが、1学年の学級担任からは、学級内で上級生と昼食を一緒に食べたいという要望が出ており、先輩と後輩の人間関係も良好傾向となっている。

Q：ピアサポートの精神がどのような場面で生かされていると感じますか。具体例を紹介していただきたい。

A：生徒自身が、自分たちの活動であるという意識の高揚が見られ、学級があたたかくなる、誰に対しても気遣いの声かけをして、その相手の存在を尊重していくようになってきた。

そして、声をかけられた生徒は、その人に協力していこうとする姿が見られるようになってきた。

以上の内容である。また、今回の発表のような体育的行事の実践や異年齢集団での活動が行われている学校は参加者の7割ほどであり、体育祭における縦割り活動が活発であることも認識できた。助言では、特別活動の目標が学校教育目標と合致していること。人間関係を築く取り組みの展開が必要であることの大切さが述べられた。特に体験活動から自尊感情を伸ばすことが意識されていることが今回の発表実践では良い点である。他者を意識して関わるのがよりよい集団となっていくことにつながり、そこにはリーダーの存在がないと集団の向上は見られない。各活動場面でのリーダーを立てることで、多くの生徒が自主的な力を伸ばすことができるとの話もあった。評価については、生徒の記述内容には今後の生活に生かしたいことが書かれている。その内容と実際の生徒の言動を日々の学校生活で見えていくことも大切である。1つの行事の活動途中での変容や行動をよくとらえて評価していくことも行っていき、全校でその評価体制を構築していかなければならない。

最後に、何か変えようとするには、教職員の共通理解、さまざまな場面における対処と行動、生徒の実態を把握することが必要である。各学校での実践に期待します。とのことばで締めくくられた。

3 グループ協議

協議事項：「各学校の課題と解決に向けた取組」

～教職員間の協力体制の構築、～年間指導計画および評価計画の工夫～

「教職員間の協力体制の構築」に関しては、校務分掌による担当者のみでなく、多くの人に担当をふりわけたり、常に報告・連絡・相談を実践したり、協力ができる体制を作る。また、同じ人が数年も担当を行っていくのではなく、担当を隔年で回すこと等の工夫が必要ではないのだろうか。また、文書データの引継ぎだけでなく、人同士の引継ぎも考えなくてはいけない。「年間指導計画および評価計画の工夫」に関しては、行事や生徒会活動で学級担任が、生徒一人ひとりの諸活動がみえない場面での評価をどう改善していくかについて、各グループで話題となった。その改善策としては、

- ・生徒のファイルやパソコン上に記入できるようにして、各担当の先生に生徒の活動のようすや変容などを記入してもらう。
- ・行事ごとの教師記入用の評価シートを活用して、自分の学級の生徒だけでなく、実行委員等で関わった生徒の活動状況を記入する、等の多方面からの評価を学級担任が知ることのできるシステムの構築を含めた、教職員側の評価方法の工夫・改善を図ることが挙げられた。